

◆【海員組合・担当支部へようこそ】 尾道支部の紹介

尾道支部では、広島県東部から岡山県までの外航、内航、港湾、旅客船、架橋料金収受会社など、32社を担当しています。

尾道市は、広島県の東部、瀬戸内海のほぼ中央に位置し、尾道三山の瑠璃山、愛宕山、大宝山（千光寺山）と、尾道水道に挟まれ、東西に細長く伸びる町です。平安時代から続く港町で、現在は20社を超える造船所や尾道海技学院など、船員になじみ深く、また近年は、映画の町、サイクリストの聖地として多くの人に愛されて、令和元年に国内外から訪れた人は440万人を超えたと発表されました。

歴史と名産品

尾道港の歴史をひもとくと、1169年に大田庄（現在の広島県世羅町）の年貢米積み出し港として、朝廷に認められたとの記述が「高野山文書」（国宝）に残っています。その後、室町幕府の将軍・足利尊氏は、明との貿易船の寄港地として港の整備を進め、江戸時代には、北前船の寄港地として発展してきました。

米の集積地であり、花崗岩からなる尾道三山の良質な水により、昔は醸造酢の製造が盛んで、その醸造の歴史は豊臣時代にまでさかのぼり、尾道で造られたお酢は、北前船で各地に送られ、当時輸送に使われた屋号の印された陶器製の容器（酢瓶）が、北海道の各地に今も残されています。

映画の聖地と古い街並み

尾道といえば、映画の聖地を思い浮かべる人も多いかと思います。著名な数々の映画、大作を世に送り出した故大林宣彦監督は尾道市の出身で、1980年代に公開された、尾道三部作と言われる映画では、ロケ地巡りに年間20万人が訪れたと言われています。

その後も、1998年の尾道市制100周年に合わせて制作された新尾道三部作と、2020年に公開された大林監督の遺作「海辺の映画館—キネマの玉手箱」により、映画ファンの聖地として名をはせています。尾道を観光するときは、映画に登場する風景などを見比べるのも醍醐味のひとつです。

尾道市は、中世の趣を残す箱庭的都市として日本遺産に登録されており、尾道三山の麓、限られた空間に多くの寺社や庭園が点在し、その狭間にある住宅や入り組んだ路地・坂道が古い時代の趣を今に残します。

尾道市の代表的な風景のひとつに、時間の経過とともに色を変える太陽光が、迷路のような路地と坂道に広がり、複雑に入り組んだ街並みを幻影のように刻々と映す風景があります。朝日が昇ると千光寺山を照らし、日没には尾道水道を照らすので、瀬戸内海の港に入港した際に時間があるときは、ぜひ尾道市を訪ねてほしいと思います。